

カレンとは誰か

——エコツォリズムにみる応答と戦術としての自己表象

速水 洋子

一 はじめに

冷戦期の一九五〇年代末から、開発と近代化を目指すタイ国家の周縁にあつて山地に居住する非タイ系言語を母語とする少数民族が、「対策」を必要とする社会問題として「山地民」(チャオカオ)と公称されるようになった。その山地民の中で「カレン」と称されてきた人々が中心になり、「先住民」の国際的な運動に関わるようになったのはタイで市民運動が盛んになりつつあつた一九八〇年代末以降である。

先住民といえ、オーストラリアや新大陸のように、ヨーロッパからの入植者によつて、先住の民が居住地を限定されていき、入植者の築いた国家に包含されていった事例がまず思い浮かぶ。東南アジア大陸部のように、歴史上常に人の移動の波が絶えない場で、なぜ、いかにして先住民なのか。それは、一九九〇年代にかけてのグローバルな動きと、当時のタイの状況が呼応しあう中で生じた語りであるといえるだろう。それゆえに、グローバルな動きの中で「先住民」の名乗りがもたらしたものを検討する上で、興味深い事例といえるかもしれない。

一九八八年に北タイの都チェンマイにて、カレンのリーダーを擁する北タイ山地民の団体を含むアジア先住民協定基金^{〔1〕}というNGOが開設された。その集会で結ばれた「アジア先住民協定」では、アジアの先住民とは次のようなも

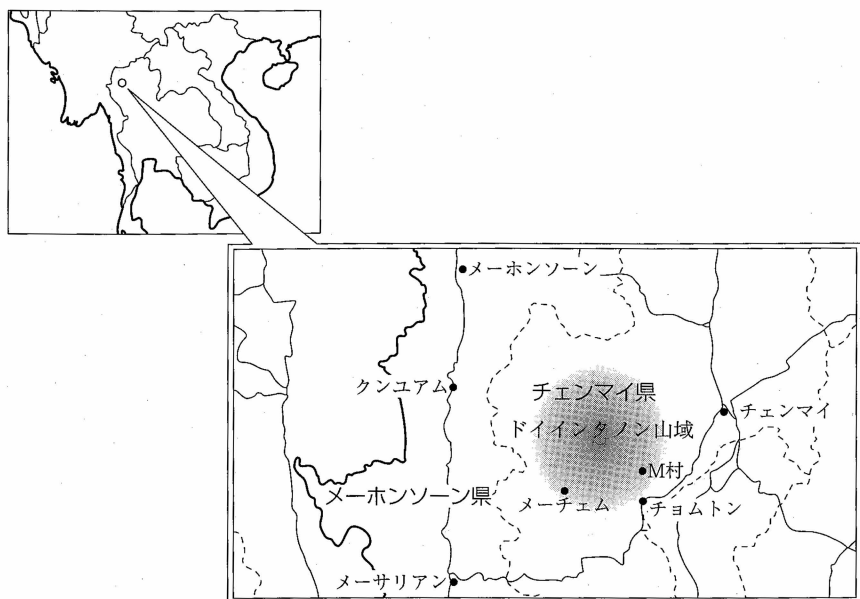


図1 タイ北部

のであるという宣言がなされた。「原住民、部族、ネイティブ、山地民、あるいは少数民族などと様々な呼び方をされるが、アジアにおける先住民は……征服された特定の領土の先住者の子孫であり、支配社会の他セクターから区別されるものと自認する。自らの言語、宗教、慣習、世界観と、これを次世代へ伝える強い意志を持つ。中央化した政治組織を持たず、共同体レベルで組織され、合意に基づく決定の方法については非常に進歩的な手段を持つ。またしばしば先住民は、自らがその一部とさせられた国民国家の最も抑圧されたセクターであると自覚する。」

この動きの中で、少なくとも一部の Karen を含むタイの少数民族の代表が、自他ともに「先住民」としての名乗りをあげたのである。本章では、第一に Karen が「先住民となる」過程を追い、第二に、その過程で生まれた Karen をめぐる自他の表象と戦略について論じ、第三に、近年のエコツーリズムの事例をオルタナティブな戦術として検討する。そして、Karen による先住民の名乗りの持つ意味について考察する。

タイでは、タイ系諸民族の現在のタイ領内への移動以前から、特にモン・クメール系のモンやラワが先住者で

あったこと、その後続がカレンであったこと、ここまでは共有された先史といえるだろう。他方、二〇世紀に入つて多くの焼畑民が隣接諸国からタイ領内に移住してきており、カレンの移動も今日のミャンマーからの難民の流入にいたるまで常に続いてきた。国境の脆弱性が、タイにおける文字通りの「先住者」の定義を困難にしていることはたしかであり、一部には実際に市民権も持つ山地に住むカレンさえも、外来者のレッテルを貼られるゆえんである。一九五〇年代末からの山地民政策においては、カレンはより後発の山地民とともに侵入者と位置づけられ、政策の対象となった。だからこそ、歴史的にタイ族に先んじて現在のタイ領土内にカレンがいたという認識は、ある程度一般化されているにもかかわらず、あらためて先住性の主張が必要になったのだ。森林をめぐる住民と権力側の闘争の場面でも、これが一つの争点となる。「祖父母の代、その前からこの森に住んできた。そして森を保ってきた」という先住の主張が森への権利の主張の一部をなすのである。

カレンとは他称である。言語学的にはチベット・ビルマ語族のカレン語系統の諸言語を母語とする人々をさすが、スゴー・カレン語では、「カレン」あるいは「人間」を「バグニョ」といい、ポー・カレン語では「プロウン」というなど、同類意識を持つカレン系言語話者の間でも、共有された自称がない。そのため、植民地期以来一般的に使用されている「カレン」が他称として定着している。ビルマ語の「カイン」の英語化した呼称である。カレンを自称する人々は、タイでは約四〇万人、ビルマでは三〇〇万人以上（全人口の一割近く）とされ、その主要グループは、スゴーとポー、そしてブウエである。

カレンが先住民として名乗りをあげるようになるまでの過程は、三つの時期に分けることができる。第一は一九世紀まで、王国の縁辺に居住していたカレンが、分立する王国とその住民と、それぞれの文脈において相互関係を築いていた時期であり、そこでは現在の北部タイあたりのカレンは北タイ系の言語で「ヤーン」と呼ばれた。第二は、タイが国民国家形成の中で山地の人々を政策対象となる「山地民」（チャオカオ）として一括総称した時期であり、カレンはその文脈では中央タイ語で「カリアン」であった。そして第三に、こうした上からの名付けに対してカレン自身が、先住民の主張を展開し、「バグニョ」とスゴー・カレン語の自称で総称されるようになった時期である。この変遷を追

いながら、カレンの自我認識と表象の変遷を概観してみよう。

二 近代以前——王国縁辺の「森の民ヤーン」

チェンマイの王朝年代記などにカレンに関する記述が登場するのは一八世紀のことであり、そこでの呼称は「ヤーン」である。当時、王国の縁辺にあつて、一部のヤーンは、森の民として蜜蝋や香木、木綿などを貢納していた。王国の支配は、明確な国境線をもった領土支配というよりは、自らの影響力の及ぶ範囲の人的支配であり、縁辺の人々は貢納による緩やかな被支配関係をもったのである。カレンはタイ系の王国と、ビルマ族の王国の間に居住していたため、王国間の戦闘に様々な形で駆り出され、食料、兵力、情報の提供、運搬やスパイに利用され、あるいは緩衝地帯の要にあつて地元首長として重用された。一八世紀の北部タイでは、戦闘の影響によるカレンの移動が少なからずあつた。

一九世紀、ビルマ側からイギリス植民地支配下、国境域のチークなどの資源を求めて国境制定への圧力がかかる。タイでは諸王国分立の状況から、一九世紀末には、バンコクを中心にチャクリ王朝による統合が進み、ビルマ側のイギリス、インドシナ側のフランスの両圧力のもとで、国境線の交渉を経て、近代領域国家への歩みが始まる。国境線の制定、国家領土の確定とともに、その領土内に居住する民に関する情報収集と分類が始まった。たとえば一九二〇年、王室メンバーなどのエリートから構成されたサイアム・ソサイエティは、少数民族に関する情報収集を行い、その雑誌に掲載している『Siam Society 1922』。当時、王国の人々（チャオ・ムアン）に対して、森の民（チャオ・パー）とされたのは、ラワなどのモン・クメール系の先住者、およびヤーンと呼ばれたカレンである。そのさらに縁辺にあつては、カーと呼ばれる人々が王国の統治外の非文明の人々とされた。

一九五〇年に出版された地方誌家の著書には、様々な「ヤーン」が無体系に列挙され、それぞれの特徴とともに言及されている『Bunchai 1955 (1950)』。たとえば、「山ヤーン」は、汚くて水浴嫌い、移動性が高く、慣習を強固に守り、

閉鎖的である。「水ヤーン」は、清潔で水浴好き、「白ヤーン」は、親切でもてなし上手、謙虚で抑制がきいていて、大望を抱くことがなく、自然を愛好する人々である。彼ら白ヤーンは共同体の結束が強く、低地民と関わりとうしない人々で、長老は尊敬され、道徳的に正しく実直な人々である。「ヤーン・カルー」は、平和を愛する、など「[old]」。このような、様々なヤーンはおそらく、現地で直接接触する人々が呼ぶ呼称やイメージをそのまま各地から拾ってきたものと思われる。すなわち、上からの統括的・体系的な分類がなされる以前の状態と理解してよいだろう。

三 近代国家のもとで周縁化された「山地民カリアン」

一八世紀末から一九世紀初頭にかけて、隣国の戦闘を逃れ、土地を求めてタイへ移住してきた非タイ系の少数民族人口が山地で増加していた。大戦中から戦後にいたる、タイのナシヨナリズムにおいて、「正しきタイ」人とはタイ語を話し、仏教徒で、タイ王への忠誠を示す者であるという規定が明確化されていくと同時に、これにあてはまらない「他者」も見定めていく。そして戦後の国民国家形成のもとでの開発と冷戦時代を迎えると、正しきタイ国民像においてはまらない山地の焼畑耕作民は、国家統合上の問題として、共産ゲリラ化、森林破壊、麻薬の生産売買を行う異分子として、様々な政策の対象となる。一九五九年に山地民政策が本格的に開始したときに、政策対象として挙げられた公定山地民とは、カレン、フモン、アカ、ラフ、リス、ミエン、ラワ、カムー、ティンである。一九六三年には、内務省公共福祉局山地民福祉課が山地民研究センター（後、研究所）を設立した。この過程で、それまで王国の縁辺にあつて、低地首長とも関係をもってきた森の民ヤーンは、隣接諸国から侵入し、国家の治安を揺るがし、天然資源の脅威となる焼畑を行う山地民カリアンと呼び替えられた。一九六三年に刊行された先述の地方誌家の著作には、前著とは異なり、もはや森の民ヤーンとしての無体系な羅列ではなく、山地民カリアンとして言語系統によって体系的に分類・記述されている[Banchai 1963]。王国の縁辺の森に住む者、あるいは王国の文明と対比された森の民に代わって、タイ国家にとって脅威たる人々としての山地民に名付け替えられたのである。山地には開発と社会統制のために多く

の国際機関によるプロジェクトが入る一方で、国境沿いでは、ケシを栽培する村が国軍による焼き打ちにあうなどして、領土内でもはや生活が成り立たない状況に追い込まれ、事実上国外へ追放された。こうして国境線の内側が、近代国家への歩みの中でまさに実質的に領土化され、領土内の山地民は国民化するため、開発の対象とされたのである。そうした「山地民」の中でもカレンは、従順で統治しやすい反面、開発プロジェクトなどには乗りにくい伝統と共同体を堅守する人々というステレオタイプ化された認識が山地に関わる人々の中で定着していた。一九八〇年代、冷戦が終わり、共産ゲリラの脅威もなくなると、山地は観光資源として開かれていく。色彩豊かな山地民は、観光の対象ともなり、また山地出身の女性がチェンマイのナイトバザーで手芸品等売る姿が見られるようになる。

タイで市民運動やNGO活動家が環境保護を掲げた政策の是非を問うたり、ダム建設などに反対するようになったのは、冷戦、学生運動も終結した一九八〇年代である。中でも、中西部のカレン居住地域でのダム建設反対運動や、野生動物保護区域制定に伴う立ち退きへの反対運動などを契機に、カレンが可視化されていく。八〇年代からタイでは森林保護政策が転換期を迎え、森林保護区域を制定し、国土面積のすでに三割をわたった森林を四割に戻すことが目標に据えられた。ことに、一九八八年に南部で洪水による大被害が生じたのを契機に、水源地帯である北部の森林に関心が集まる。一九八九年には森林伐採禁止令が出され、事実上焼畑は不可能になる。こうした中で、山地居住の焼畑民を、森林破壊の元凶と見なす言説が強化された。

四 森林をめぐる権利の主張

それでは、この当時具体的な運動の中で、どのようにカレンの自己表象が効果的に動員されたかを見てみよう。ここで挙げるのは、筆者の調査地のすぐ近くで起こった運動である。これについては、既出論文で詳細に取り上げているので「速水 一九九九」、概略のみ記す。

発端は、王立プロジェクトが入っているメーチェム郡北部一五カ村地域で、森林局傘下の森林産業組織(FIO)が、

国際林業資本と、松の製材プロジェクトをもたらそうと計画した（事前調査は一九八四年）ことである。同地域には、海拔一〇〇〇メートルの高原にある二万四〇〇〇ヘクタールの松の樹林帯があり、チェム川の水源林として森林局の分類では、最も保護を必要とする地帯（分類ⅠA）である。プロジェクトに対して、行政区の区長（カムナン）が村民を代表して一九八九年に県に反対文書を提出した。後の当事者の説明によると、これに対してFIOとともに事業を進める王立プロジェクト側の代表が、村民を集めてその不服従を叱り、すでに同地域への定住の歴史がほぼ一世紀になる住民に対して、「いやならビルマへ帰ればよい」といい放ったことから、対立と不信が深まったという。

その後、一九九二年にはFIOが村の合意を得ることなく製材所を建設し、住民の反対運動もピークを迎えた。住民は、それまで自ら守ってきた松林の伐採による生態系の破壊を恐れた。そこでは、自分たちがこれまで共同体ベースで慣習的に森林を保護してきたこと、FIOの方は、木しか見ておらず、森、土、人の相互関係を見ていない、と、プロジェクトの生態的インパクトをよく心得ているのは自分たちであることを、科学者のバックアップを得て主張した。そして、国の重要な天然資源を守ってきたのは地元民の方であり、プロジェクトは国家の名を借りてそれを破壊しようとしている、と。この時点で運動は、地元民のみならず、下流域のタイ系農民、環境保護の市民運動、僧侶、知識人、NGO、メディアなどに広がり、反対集会はメディアを効果的に動員したイベントとなった。そして、松の木一〇〇〇本に黄色い僧侶の衣を着せ、木に「授戒」した。森の緑に、黄色い僧衣、カレンの赤い民族衣装が映えた全国報道で、「母父、祖母父から受け継いだ土地を守るのは我々である」と訴えた。訴えを通す法的根拠は何もないが、先住の歴史と、森と共生する共同体の伝統によって森林を保護育成してきたという環境保護の立場に立った主張を展開し、最終的に、プロジェクトを撤退へと追い込むことに成功した。

地元民は、法的根拠はないまま自らその土地に代々定住し、森を守ってきたことを主張している。このように後に見る先住民の主張の始まりは、山地の人々の森での生計が脅かされたダム建設、国立公園囲い込みなどに対する、地域で展開された文字通り先住者としての主張であった。本来ある土地に居住しそこで生計を立てていたが、後発の侵略者にその土地で暮らす権利を脅かされる人々、共通の伝統・言語・文化を持ち特定の領域に居住し、その領域と同

一化し支配民族に対して不利な立場に置かれる人々、としての先住民の主張が、北タイ山地の権利の主張と適合した。それゆえに、まさにこうした主張は、彼らをより大きな先住民運動の中に位置づけることを可能にし、それがローカルな主張に力を与えたのである。

五 国際化する「先住民バグニョ」

タイ山地の人々が国際的な先住民運動に参加するようになるのは、丁度一九八〇年代末頃からである。グローバルな動きに乗って先住民の主張が彼ら自身の声で聞かれるようになる。山地の人々の主張は、むしろ一つ一つのローカルな運動において、時に先述の松の製材プロジェクト反対運動のように成功を見せており、その成功が先住民の主張に力を与えた。一方、全体的な動きとしては、必ずしも共同体による森林管理への動きは進展を見せておらず、政治的混乱の中で一〇年以上も国会で審議を繰り返してきたコミュニティ・フォレストリ法案^②は、結局二〇〇七年一月によりやく、森林区域の共同体にとっては不満足な形で通ることとなった。

タイにおけるカレンの表象を理解する上で重要な要素として、一九九二年に国連環境と開発会議で強調された「先住民的知識」の重要性が特筆される。その定義は、「特定の地理的領域に生活する土着の人々によって保持され、発展された独自の伝統的な土地特有の知識。このような知識の体系の発展は、自然環境の管理を含む生活のすべての分野にわたるもので、その体系を生み出した人々の生存に関わるものである。動態的な体系であり、常に更新される。それらは、しばしば学問や研究の制度的な枠組みによって生み出される体系的な知識とは対照的とされるもので、権力なき人々の非体系的な、文字化されない知識である」というものである。カレンの自他の表象が呼応していく上で、この先住民的知識は大きな役割を担った。

この時期からタイではカレンに関わる、一般タイ人向けのタイ語の出版物が急増している。古老による語りを書き下ろした書物や、NGOによる出版物である [Beu Phan 1997; Kachapjai 1989; Kannikar & Benchai 1999; Leesa 1991; Phan Lee

Paa & Kalayaa-Wirasakdi 1987; Pinkaew 1996]。一九八〇年代には、一般タイ人の山地への関心はほとんど見るべきものがなかったのが、一〇年経てこの時期になると、先住民の知恵や、焼畑が一定の休閑期間をおけば持続可能であり、カレンは森と共存する独自の伝統を持つ人々である、といったキャッチフレーズのもとで、多くの関心が集まる。こうした中で、これまでの「ヤーン」でも、「カリアン」でもなく、スゴー・カレン自身の自称である「バグニョ」が一般化され、「森の自由人バグニョ」「バグニョの土着の知識」が喧伝される。こうしてカレンは、非文明の森住の他者から、国家の治安と資源を脅かす山地民へ、そして、森林の知識を豊かに持つ森の住民、自然と共存する人々へと変遷しその中で自らの声を得ていった。

一九九四年には北部タイ農民ネットワークがカレンのリーダーらにより結成された。彼らは貧しい農民として声を上げ、精霊信仰や儀礼を復興・再興して伝統を改変した形で自らの文化に根拠を置く主張を展開し、焼畑の持続性や、山地の森における環境保護を訴えることに、場面場面で成功してきた。そうしたわかりやすいイメージは、その声とともに、メディアなどを通じて一般タイ人にも届いたのである。商業主義文化に辟易した一部のタイ人には、森と共存する人々のイメージは、懐古とロマンを想起させるものでもあった。

六 先住民の主張とカレン・コンセンサス

こうした中で、森林資源と山地居住者の権利の議論とともに、カリアンからバグニョへ、「山地民」から「先住民」へ、言い換えが自他ともに始まる。そこには、カレンの森林への権利をめぐる運動を支えるNGOや市民運動の担い手、学生や研究者、僧侶など、そしてカレン自身の声も加わっている。ここでは、「ヤーン」をめぐる言説も含め、これまでカレンについて生み出された多重の語りから、カレンとは持続的な焼畑による自給農業を生業とし、平和的で、共同体意識（すなわち個人主義的ではなく）と伝統維持の傾向が強く、森と共存する人々、商業主義や開発に対して奥手で、世界観も持続的な自然資源の利用と不可分な人々であるという語りが強化されていた。そして焼畑については、それ

まで用いられていた「ライ・ルアンロイ（浮遊する畑）」ではなく「ライ・ムンウィアン（回転する畑）」という、言い換えがなされた[Prisaw 2003]。すなわち無責任にあちこちに畑を作っているのではなく、一定の土地で法則性を持って持続可能な方法で回しているというイメージである。森の豊かな「土着の知識」を持って、森や自然と共存する森の民カレンという像は、カレンの古老の語りや口承伝承を紹介する出版物などで喧伝された。

こうしたカレンをめぐる語りを人類学者ウォーカーは、「カレン・コンセンサス」と呼んで、カレンを一元化する表象であるとして批判している[Walker 2001]。批判の第一点は、生業形態も文化も多様で資本主義経済に大きく影響を受けてカレンの生業が大きく変化している現状を隠蔽してしまうことであり、第二点は、開発を受け入れないカレンの特徴をよしとするような論調は、必要な開発努力を阻止してしまう、ということである。筆者自身も、実際には山地カレンの生業形態は多様で経済状況も異なり、それぞれの場できめ細かい対応が必要であること、そして多くのカレンは、むしろ水田耕作を主たる生業としており、逆にある意味ではそのために、低地の農民と、水資源をめぐる立場を共有していたことを指摘してきた[Hayami 2001]。カレン・コンセンサスの背後にある低地の開発者対山地の森林保護者という単純な図式は、低地側から描かれたものであり、カレン側はまさにそれを逆に利用して応答した結果、図式は強化されたのだといえる。

これに対してこうした批判は、最も有効な闘争の戦略を剝奪するものであるという反批判がなされた。人類学者ヨットは、ウォーカーが、カレン・コンセンサスとして批判する言説は、カレンの先住者の知恵や慣習を中心とした自己表象、自らの声を上げて文化の自己主張をする上で力を持ってきたのだと反論している[Yo 2004]。たしかに先述の通り、こうした語りはローカルな個別事象における反対運動で力を発揮してきた。すなわちカレン・コンセンサスは、特定の時期にタイで、本来何ら権利主張の根拠を持たない山地の少数民族に、押しつけられてきた「カレン像」を逆に流用して応答する戦略の本質主義として重要な役割を果たしたという。カレンが従来自らに課されてきたステレオタイプを利用して、効果的に自己主張を展開したことを積極的に評価するのである。

一方ウォーカーの批判は、より普遍的な戦略の本質主義への批判と論調を一にする。一元化した語りの限界は、内

部の多様性を抑圧すると同時に、支配的言説の形をなぞりそれを上書きすることになる。戦略としては一つの段階として受け入れられるとしても、そこでは常に支配側の論理を逆手にとる危うさがつきまとう。つまり、自他の境界をより明瞭にするアイデンティティの政治の論理をなぞってしまふ。意識的にカレン・コンセンサスを自認して、これを自己表象とする者とそうでない者に分け、後者を、まだ主体化していない、と決めつけることになる。被支配者が支配者による呼称や言説を肯定することは長い目で見ると抵抗なのか疎外になるのか。戦略的な段階に過ぎないなら、今後どのような道を選ぶのか。コンセンサスとは異なる抵抗のあり方があるとすればどんなものなのだろうか。以下では、エコツーリズムをめぐるカレンの自他表象を通じて、この問題を考えてみたい。

七 エコツーリズムの中のカレン

一九八〇年代、タイでは観光振興の中で山地民は北部の観光に彩りを添える重要な要素となっていた。タイ国家の治安の行き届かないアヘンを生産する地域での、冒険のイメージがトレックカーをそそり、中小規模のトレッキング業者が林立し、より辺鄙な、より「現代文明に毒されていない」山地民村へのツアーを宣伝した。当時の研究報告は、こうしたトレッキングの観光収入はごく一部の住民に小遣い程度の収入をもたらすのみで、むしろ貧困化を招く例すらあることを指摘している [Cohen 1996]。

一九九〇年になると、タイ観光局 (Tourist Authority of Thailand) がエコツーリズムを推奨し始める。同局によるエコツーリズムの定義は、「教育、娯楽、(自然と社会の両方の) 景観や地元の人々の生活様式を鑑賞する目的で観光地域を、同地域の生態系への責任をわきまえて訪問すること」というかなり包括的なものである。一九八〇年代においてタイの森林域の囲い込みの大きな要因の一つは、国立公園の制定が進んだことによるが、エコツーリズムはこの広域化する国立公園を経済行為の対象にする方途でもあった。また、同じ頃から一般タイ人の「自然」や森林保護への関心も高まっていた。こうした中で、従来の山地への開発のオルタナティブとして共同体の内からの発意や文化振興への関

心とあいまって、山地を中心とした共同体ベースによる責任あるエコツーリズムを推奨するNGOなども設立された。また、二〇〇〇年が「国立公園訪問年」に制定され、国内の八一の国立公園を対象に、観光局が中心となってエコツーリズム振興が目指された。こうしたエコツーリズムに対してはタイでも賛否両論があるが、山地の人々の自己主張の手段となっている側面も指摘できる。

須永は、メーホンソーン県のカレン村落におけるNGOの介在したエコツーリズムの例を報告している「須永 二〇〇六」。焼畑を行っている地域で道路から遠く、開発プロジェクトによる換金作物栽培の振興が思うように進まず、従来型のトレッキング観光は部分的に経験していた村落で、共同体ベースのエコツーリズムが一九九六年にNGOと地元とによって始められた。地元民もエコガイドとしてのトレーニングを受け、NGOを通じて客を受け入れる形が進められた。ホストファミリーとなる世帯は、ローカルガイドとして焼畑や森を案内し、在来品種の多様性や循環型の持続的な焼畑を何世代も行ってきたことを村の歴史とともに語り、家周りの菜園と草木染めなどを見学してもらい、無農薬野菜中心の食事でもてなし、森のトレッキングでは森に自生するランや薬草の説明をする。

須永の分析によれば、こうした事業を通じて、地元のカレンは自ら森を地図化し、自分たちの慣習を「生物多様性、無農薬、水源林保護」といった環境保全の用語で語ることで客体化し、普遍化する。それによって、自分たちの土地の知恵を環境保護言説と近代的テクノロジーに「節合」している。先住者の知恵といえば、先述の定義の通り、得てして近代科学的知識と相反するものとしてイメージされるが、ここで主張されるのは、相互の節合である。そして従来のトレッキングでは、外部者が勝手に思い描いた「山地民」像を語ってきたのに対して、内部者が自らの慣習知・身体化した知識を意識化し客体化し、環境保全のイデオロムで語り直している。それによって、外部者との交渉を可能にしてきたのだという。それは、権力側の近代概念への従属ではなく、学習過程によって自らそこへ節合し、合理的な用語を用いて自らの知識・生活を守っているのだと説明している。

ここで行われていることは須永が指摘するように、先述の「コンセンサス」の内容をなぞった実践などではない。観光の場で、自ら環境保護の語りを通じて表現することによって、カレンの焼畑の非合理性、非近代性非難への近代

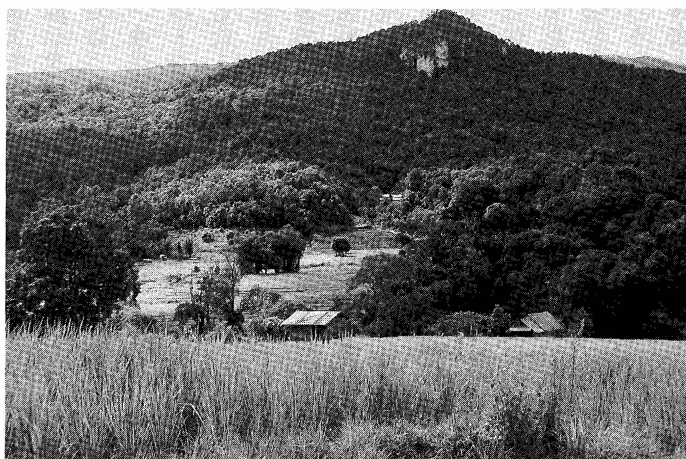


写真1 M村の遠景

(以下、本章の写真は2003年8月筆者撮影)

の語彙を用いた応答となしている。それは応答によって、自己の身体化され慣習化された知を再帰的に言語化（タイ語化）して表現する自己変革でもあるだろう。それは、須永も指摘するように、たとえ一部の指導的立場にある人々によるものであるにせよ、単なる文化の政治学であるのみならず、森林資源利用をめぐる公共空間の構築といえるのかも知れない。しかし、こうした形でタイ語化した知識が彼らの身体化された慣習知を塗り替えていくのだとすれば、非近代による近代への節合とは、最終的には近代に取り込まれていく過程ではないのかという疑問が残る。

筆者自身も、二〇〇三年にドイ・インタノン国立公園の縁辺にあるカレン村（写真1）にてエコツーリズムの事例を調査した。まずはその概要を紹介しよう。この地域にカレンが移住したのは一八九〇年代とされ、現在のM村自体の設立は一九四七年である。ドイ・インタノン国立公園はタイでも古く一九五九年に制定されているが、一九七二年に公園区域が拡張され、境を接するM村はその影響を直接に受けるようになった。チェンマイからの車道が整備され、今では二時間程度で訪れることができるため、観光客も増加している。一九七〇年から同地域には王立農業プロジェクトが入り、換金作物栽培を奨励してきており、国立公園化の影響により、一九八

○年代には焼畑は完全に行わなくなっていた。それでも、狩猟や畑作など森林利用や土地利用をめぐる公園局側とは常に葛藤が続いてきた。生計の主体は水田稲作と換金作物栽培（コーヒー、生花、イチゴ、キャベツ、その他の都市近郊野菜栽培など）である。

一九九九年に、ドイ・インタノン国立公園局側の申し出により、ここでエコツーリズム事業が開始されることになった。国立公園局は、公園自体のエコツーリズムを推進しているが、それとは別に、地元村ベースのエコツーリズムを持ちかけたのである。複数村が対象であったがM村は特に道から近く、立地条件が良かったため中心に据えられた。公園局側が明示したその目的は、①エコツーリズムによる補足収入源の提供、②森林の不法使用への村民による自己規制、③カレンをめぐる真正な知識の提供によるカレンに対する外部者の誤解の是正、そして④共同体内での環境への意識醸成、としている。

M村では、先述したメーホンソーンのエコツーリズム村などを視察し、公園局側の要請を直接受けた村長が二人の入り婿の若い村人と事業を進めた。後者は、チェンマイの師範学校を卒業し、区自治体協議会の委員で広くネットワークを持つSと、高卒で会計能力もあるCとの二人である。四カ村の村長と、郡自治体メンバー、そして数人の村民からなる一三名の委員会によって運営し、企画と実施はCとS、それに公園の官吏が助言をするという形で始まった。村には「土着の知識」の宝庫のような長老も数人いるが、彼らは一切関与しておらず、その意味で「先住民の知恵」は、この事業には関与していない。発端からすれば、境界線をめぐる抗争や、狩猟などの森林活動の規制をめぐる村民と公園局側の葛藤の末に公園局側が否応なく押しつけた事業でもあり、立場上拒否はできない村長が話を受け、それを数人の若い村民と五五戸の世帯のうちの五分の一ほどの参加を得て始めたものだが、二〇〇三年の時点で大半の村民は積極的に参加してはいなかった。

初期投資としては森林局および公園局から四〇万バーツ^③、そして村民のボランティア投資により一口四〇〇バーツ（四年目には一〇口）で始められた。これらはエコツーリズムの施設のための地代、バンガローの建設（写真②）、必要品の購入等に当てられ、調査当時四年目が終了する時点で、八万バーツの負債を残すのみとなっており、経営的には順



写真2 宿泊用のバンガロー

調に進んでいたといえるだろう。⁽⁵⁾

Sは、負債を全額返却後は、村への還元が増えるため、参加希望者も増えると思込んでいる。一つ一つの収入は小さいが、持続的な収入源となれば決して無視すべき額ではない。ツアーに関わる客側の出費は表1の通りである。M村を訪れるエコツアーリストは、Sの広いネットワークで観光業者の斡旋を経たり、一部は国立公園局経由、あるいは口コミ、パンフレットなどによっており、八割はタイ人であるが、欧米、日本からの客も二割強ある。また、立地条件が良かったため大きなスタディ・ツアーなども受け入れている。

もはや焼畑を行っていないこの地域で、カレンとしてのエコツアーの演出は、前出のメーホンソーンと大きく異なるのは当然だが、M村では、「先住民の知恵」といえるような演出はなく、むしろ、焼畑を行っていないことを示した上で、今ある状況でどのように工夫して環境保全を心がけつつ生計を立てているかを見せている。実質的なエコツアーのプログラム内容もほとんどがSらによって決められている。たとえば、村内博物館（写真3）である。Sが自らの家の庭先に建てたもので、建物は他のカレンの家と同様の竹と草葺きを用い、少し間取りを変えたものである。博物館の展示物は、伝統的ともいえるカレンの日常生活から抜き出したものであり、その意味では実際に周囲の

表1 M村エコツアーの価格表

観光客向け料金表	B(パーツ)
滝の見学を含む半日ツアー (グループ価格)	200
山頂までの一日ツアー (グループ価格)	300
両ツアー含む一泊コース (グループ価格)	600
村内ツアー (グループ価格)	100
畑ツアー (グループ価格)	100
バンガロー一泊 (一部屋)	雨季 400 乾季 800
食事 (一食)	50-80
ホスト側収入	B(パーツ)
一日日雇い	120
一日車レンタル	800-1000
一日車レンタル運転手付き	1200-1400
一日バイクレンタル	200
ホームステイ (一人)	100
(一泊ホストをすると委員会に幹旋料 70B)	
食事 (一食)	50

*1B = 約3円

家々にもかつて(あるいは今も)置いてあったものである。通常の家々と同じような炉の間が設えてあり、その周りに象乗りに使う座席、水牛につける鋤、楽器、調理道具や農機具などが展示されている(写真5)。展示品の内容は、たとえばチェンマイにある山地民博物館と変わらないのだが、博物館とそれを囲む空間そのものの関係の文脈が、展示を自ずと全く異なるものとしている。博物館を囲む空間は、変わりゆく世界、公園の存在によって規定され管理された空間であることを考えると、その中の博物館が見せる「伝統」は逆に一つのメッセージとなつてもいる。博物館のすぐ上には、あずまやがあり、ここでSらは「無農薬栽培」のコーヒーを竹炭で焙煎してエコツーリストに飲ませる。ちなみにカレン自身は、コーヒーを飲む習慣はない。

今一つのSの工夫としては、村内の元狩猟の名手と言われた男性を、ツアーガイドとして育てている。この男性は、ほとんどタイ語は話せないのだが、狩猟をしていた当時の森の知識が豊富である。狩人として公園当局に最も目をつけられていた人物を、このようにガイドとして表に立たせることで、公園側に恭順を示しながら一つのメッセージを送つてもいるのである。

調査滞在中に生じたいくつかの出来事が、当時のエコツーリズムの状況を如実に伝える。まずは、公園長(タイ人官吏)が訪ねてきて村民と会合を持ったことである。公園長は、予定時間に一時間近く遅れて悠然と赤いカレンの民族衣装を身につけて到着した。彼はまずスピーチをしてエコツーリズムの努力を様々に推奨した。「もつと上手に宣伝して誰の目にも見えるようにしなさい。幹線道路に出て行って手芸

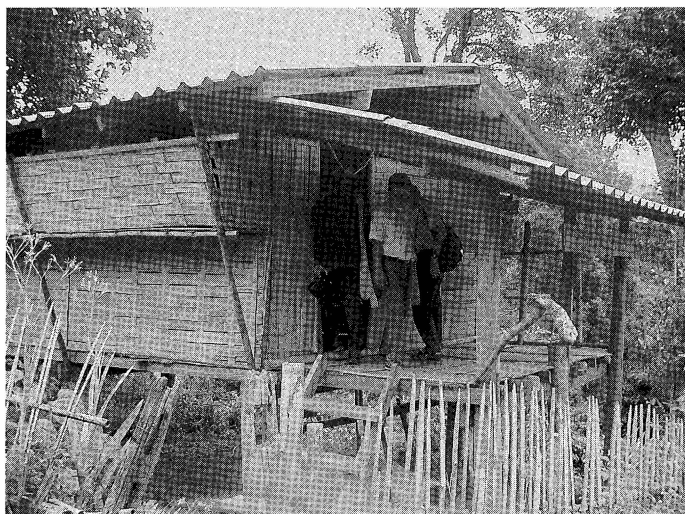


写真3 M村博物館外観



写真4 M村博物館内

品を売らなければ……。カリアンには、織物も、文字もあり、高度な文化があるのだから。もっと見せなければ。そして、自然保護が大切です。自然を守れば、人々は必ず来ます。」

これに対して、村民からの質問は二点に集中した。一つは土地登録について、いつになれば彼らの田畑を登録することができるのか、今一つはいつになれば電気が村に届くのか、というものだった。一つ目については、「地元民に土地の権利を授ければ、瞬く間にリゾート開発が進むのは目に見えている。したがって、土地登録は行わない」という返答であった。すなわち、村民へ土地への権利を認めれば、村民は金銭目当てですぐにリゾート開発に売ってしまうだろうと一方的に決めつけているのである。二つ目については、ツーリストの身になって考えれば自然の中の村を楽しむに求めるのに、電気が通っていたのでは台無しであること、したがって電気は来ない、という返答であった。村民側の要求や、彼らが望む生活改善は、公園局側の描くエコツーリズム村の像には適合せず、頭から拒否されるのである。

翌日、バンコクなどで著名になったバードウォッチングの本の著者が、ドイ・インタノン国立公園を訪問し、中でもM村のエコツーリズムの事務所で村民向けにスライドを見せながらドイ・インタノンに見られる鳥について解説した。鳥がどのような時間帯にどこにいるか、食餌行動、繁殖、などについてタイ語で講演した。多くの村の男性は少年時代からバチンコなどで鳥を追っており、鳥の行動については熟知しているが、ガイドを務めるためにはタイ語で鳥の名を知らなければならず、そうした観点から関心を持つ者は、熱心に話を聞いていた。ドイ・インタノンは鳥の種類が豊富で、訪れる観光客にはバードウォッチング愛好家が多いため、鳥に関する知識は重要なのだ。Sらは、以前にタイの文筆家が現地で集めたカレンの鳥をめぐる伝承、物語をタイ語で編集した印刷物をリプリントしてエコツーリストに販売している。

こうして、村民の熟知する森やその鳥は、タイ語の名称で再認識され、部外者に紹介すべく体系化された知識として書き直される。そして村民は「自然を愛好」することをタイ人から教えられるのである。ここに見られる過程は、メーホンソーンの事例について須永が指摘したような「節合」とは異なる。タイ人観光客に向けて見せ、聞かせるべ

き知識は、彼ら自身が森で身につけた身体化された知識とは別のものであり、必要に応じて、タイ向けの語りができるようにしていると感じさせる。

また、別の機会には、カレンの生業を視察するという目的で訪ねてきた国際的なNGOの組織するスタディ・ツアーが来村した。村長は次のようにツアー客を迎え入れた。「タイの人たちは、山に住む我々、チャオカオ（山地民）が森を侵して破壊すると考えます。皆さんは、是非我々の村と森をご自分で歩いて、これが真実であるかどうか確かめてください。エコツーリズムを始めたのはこのためなのです。カリアンがどのように生活するのか、お見せしたい。一番大切なことは、より多くの人がカリアンの生活を知ることです。」

以上、官主導で始められ、一部の村民に担われるドイ・インタノンのカレン村のエコツーリズムを紹介した。ガイドは、一〇年前の村から見える山の写真と現在を見比べるようにツーリストを誘い、森や滝などの「自然」の中で村が生活を営んでいることを見せ、森林回復の努力がなされていることも説明する。村の生業と生活を見せるがそこにはもはや、焼畑はなく、常畑での換金作物栽培と無農薬コーヒー栽培があり、水田耕作がある。二世代前までは保たれていた「カレンらしい」生業形態は、国立公園縁辺にあつて、もはや、数多の制限を加えられている。「カレン・コンセンサス」が打ち出すカレン像とは大きく異なるものを彼らはエコツーリズムの場で見せている。むしろ近代に完全に包摂された空間にあつて場面場面で表象を使い分けている。彼らが見せるのは、エコツーリズムのみならず、中央タイ村落などでも時に見られるようになったアグロツーリズムや文化ツーリズムともいえる要素も含み、土着の知恵をことさらに強調するのではなく、今日の村の生活、生業上の対応をそのまま見せ、複雑なカレン像を提示している。村の博物館で見られるカレン文化の客体化すらも、この文脈においては、不思議なメッセージが込められる。公園局との関係上、統御された空間の中で日常生活を営み、何とか生活を成り立たせ、「自然と共存」しているのを見ているのである。

八 結 び

一九六三年に公共福祉局山地民福祉課により設立された先述の山地民研究センター（後、研究所）は、異分子であり社会問題と見なされた当時の「山地民」を開発の対象として同化していく足場でもあった。この研究所は、二〇〇二年の省庁統廃合の際に閉所された[Kwancheewa 2006]。現在残るのは、一九九七年に、当時研究所にあった小さな博物館をベースに移築され別設されていた山地民族博物館のみである。その展示は、各山地民族グループの民具や儀礼具などの物質文化を紹介した後、そこへもたらされた開発や仏教化のプロジェクト、そして最上階では王と山地民の良好にして信頼に満ちた関係を描くというもので、来館者は進路に従って進むにつれ、まさに他者として本質化された山地民が、そこからタイ国民化していく過程をなぞる、という内容になっている。⁶ 社会問題としての山地民への対応の中心であった山地民研究所の閉鎖は、四〇年の山地民政策を経た後、タイ政府が、もはや山地民は問題ではない、国家統合は成就し山地はすべて近代国家に領土化され包摂されたと判断したということであり、博物館の展示は、いわば差異が飼い慣らされたことを誇示するものともいえる。それは統合された国民国家にとって今や可能な「多様性と差異の許容」であり、この文脈に限って、タイで「多文化主義」が示されたのだともいえる [Hayami 2006]。

たしかに、山地民の客体化された文化的差異は、タイの公的な場面で利用されるようになった。地方自治体の公的行事には、民族衣装を着た諸民族が呼ばれ、目に見える多文化主義とそれを許容する国家の寛容を見せる場面となる。差異が葛藤を伴わない限りにおいてむしろ強調され利用されるのであり、ドイ・インタノンにおけるエコツーリズムを公園側が持ちかけたこともそのような背景のもとで理解できる。

一方「山地民」の側も、ある文脈においては応答として外部者が描く自らの表象を逆手に利用して、自己表象を流布するようになった。カレン・コンセンサスは、まさにそのような中で生じた言説であり、それを可能にしたのはタイにおける市民運動、グローバルな先住民運動などの彼らを囲む流れであると同時に、これまでの山地をめぐる語り

の蓄積であった。カレン・コンセンサスに見られるような「持続可能な焼畑により森と共住する伝統的なカレン」像は、グローバルな先住民運動の流れにも乗り、「焼畑により森を破壊する山地民」という上からもたらされる像へ戦略的で本質主義的な応答を行ったものといえよう。先に見てきたように、それは特定の反対運動において、カレンの民族衣装などのイメージをも駆使して有効に成果を上げている。ローカルな問題に対処する抵抗運動に見られるカレン自身によるカレンを客体化して見せる戦略は、上からのラベリングへの応答として一定の成果を上げてきたのだ。

しかし、こうした戦略をもつてしても、コミュニケーション・フォレストリ法案は満足のいく形では通らず、より大きな意味で山地への視線は変わってはいないように思える。さらに、先述の通り、カレン・コンセンサスの対応は、特定のローカルな対処としては効果的でも、上からのラベリングに応答するものであるがゆえの危うさがつきまとう。まさに先述の北タイにおける多文化主義の流れ、容認できる他者の差異は積極的に見せていこうとする権力側の動きと表裏一体の形で生じた応答としての自己表象ではないだろうか。すなわち、民族文化を客体化し目的化する支配者側の語り、アイデンティティの政治にそのまま乗ることで自らの主張を通していうことである。

一方、ドイ・インタノンのエコツーリズムは、さらに近代空間に包摂された場面で、カレン・コンセンサスのような「伝統的な森の民カレン」を演じる余地すらもはや与えられていない。官主導の発端も、国立公園における位置づけも、もはやM村が国立公園の縁辺にあつて近代の空間から逃れることができないことを示している。そこで、彼らはエコツーリズムにおいて自らの近代性を見せ、かつ近代で覆われたスペースの中に反近代を埋め込み、客体化し、別のメッセージと化している。そうしていかに自らが様々な制限を受けながらも生活を守っているかを見せてくれる。支配側の器や表象を利用しながら、否応なく包摂されながら、その中で自らの生活を意味あるものとして見せている。土着の知識をあえて持ち出すことをせず、固定された表象ではなく錯綜する様々な異質な表象を取り込んだ日常実践をもつて応じている。

カレン・コンセンサスの語りそのものが、戦略として理解されるならば、そしてそれが戦略の本質主義という一つの段階であるならば、ドイ・インタノンのこうしたその場の対応は、むしろ日常実践から生まれた戦術という

べきものかもしれない「セルトー 一九八七」。支配者に押しつけられたもの、制度、表象を受け入れながら、支配者が意図したのは別のものを作り出していく受身の、その場その場の技である。もはやM村は近代支配に包摂された空間であることから逃れられないが、そのただ中から雑多な要素をかき集めて応答している。ここでは、もはやカレン・コンセンサスに見るような先住民性やアイデンティティの政治は武器にならない。そのオルタナティブとして、支配者側が自分たちを包摂するとき自分たちに向ける様々な他者規定を流用し、臨機応変に使い分けながら応答するのである。

山地の人々がタイ国領土内の森林に対する権利と市民権を求めるとき、一九八〇年代から九〇年代にかけてタイ国家の山地民政策を規定してきた論理は、領域国家の領土を外来者から守ることであった。だからこそ、それに対抗して領域内にタイ族以前から居住していたという「先住民」の言説が一つの有効な手段として用いられた。北タイ山地の人々の様々な応答を見る限り、「先住民」はある局面では非常に効果的だった。しかしそれは、グローバルに自らの主張に意味を持たせる過程でのアイデンティティの政治が有効な局面における一つの応答の選択肢に過ぎない。

付記 本章文のドイ・インタノンに関するデータは、平成一五年度日本生命財団一般研究助成（代表 神崎護）で行った調査に基づく。また、二〇〇五年四月五日国際タイ学会（米国北イリノイ大学）にて企画した *Redefining Otherness* と題したパネルで発表した “Who are they/we the Karen?: negotiating ethnic imagery between self and other”. この論文（CD-ROMにて配布）をもとに、その後 “Negotiating ethnic representation between self and other: the case of Karen and eco-tourism in Thailand”, *Southeast Asian Studies* 44(3): 385-409. として刊行したものを、大幅に加筆訂正したものである。

- (1) Asian Indigenous Peoples Pact Foundation は、チェンマイに拠点を置いて一九八八年以来活動をする。一九九二年に初の全体集會をバンコクにて開催。東南アジア各国のほか、台湾、日本、バングラデシュ、インドなどからも参加団体が集まった。
- (2) 地域住民に森林地の管理を委ねるためのコミュニティ・フォレストリ法は、一九九一年に知識人、NGO、森林局官吏などによって起草され、当時画期的な運動の成果だったが、森林地の管理権や所有権をどの程度まで委譲すべきなのかなどの問題をめぐって議論が交わされ、何度も改訂を加えられている。その後の政局の変動と相まって法案は二〇〇七年一月によりやく通過したが、その内容は、森林域にあるコミュニティの森林権を認めるものとはなっていない。
- (3) タイの環境運動家の間で広大な国立公園を、エコツアーによる環境侵食を顧みず外貨獲得のために利用しているのだとの批判、あるいは経済効果や分配の不平等、持続可能性をめぐって地元住民からの批判、さらに文化の商品化であるという批判もある。
- (4) 二〇〇三年当時から今にいたるまで、一パーツはおおよそ三円。
- (5) 施設立地地となった敷地の所有者は二人で、そのうち一人はS自身である。彼は自身の水田地を無償提供している。もう一人は、隣村居住者で水田を契約貸与しており、一年目は三ライ（一ライは約一六〇〇平方メートル）で六〇〇〇パーツ、二年目から六年目まで年額一万パーツの地代を取っている。
- (6) この展示については、ジョンソンおよび石井が同様の趣旨で詳細な紹介と分析を行っている [Janson 2005; 石井 二〇〇七]。

参考文献

- 石井香世子 二〇〇七『異文化接触から見る市民意識とエスニシティの動態』慶應義塾大学出版会。
- 片岡 樹 二〇〇二「もうひとつの「もうひとつの知」——山地民ラフにおける神義論とカリスマ」『タイ研究』二巻、四五—五九頁。
- 須永和博 二〇〇六「自然／文化をめぐる交渉——タイ北部山地カレン社会におけるエコツーリズムの民族誌的研究」立教大学大学院観光学研究科博士論文。
- セルトー、ミシェル・ド 一九八七『日常の実践のポイエティーク』山田登世子訳、国文社。
- 速水洋子 一九九九「タイ国家の領土におけるカレンの土地権——共同性と伝統の構築」杉島敬志編『土地所有の政治史——人類学的視点』二〇一—二二八頁、風響社。

- Beu Phau 1997 *Chiwit Khaa Pka Keu Nyau: withi thammachaat khong isarachon bon phuu suun*, Bangkok: Sarakadee Press.
- Bunchuai Srisawat 1955 (1950) *30 Chaat nai Chiang Rai*, 5th edition, Phranakorn: Rongphim Rap-phim.
- 1963 *Chaw Khaw nai Thai*, Bangkok: Odeon Store.
- Cohen, Eric 1996 *Thai Tourism, Islands and Open-Ended Prostitution*, Bangkok: White Lotus.
- Foundation of Education for Life and Society 2002 *Lamnam Phleng Pkakeunyau*, Bangkok: FELS.
- Hayami, Yoko 2000 "Challenges to Community Rights in the Hill Forests: State Policy and Local Contradictions: A Karen Case", In *Tai Culture: International Review on Tai Cultural Studies* 5(2): 104-131.
- 2006 "Introduction: Redefining Otherness from Northern Thailand: Notes Towards Debating Multiculturalism in the Region", *Southeast Asian Studies* 44(3): 250-274.
- Hinton, Peter 1983 "Do the Karen Really Exist?", In McKinnon, John and Wanat Bhruksasri (eds), *Highlanders of Thailand*, pp. 155-168, Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Jonsson, Hjorleifur 2005 *Mien Relations: Mountain people and State Control in Thailand*, Ithaca and London: Cornell University Press.
- Kachatpai Burusaphat 1989 *Chaw Khaw*, Bangkok: Phraephitaya.
- Kannikar Phromsaw and Benchai Silaraks 1999 *Paa Jet Chan Panyaa Praach: jaak kham book law khong Phoo Luang Joni Odocha*, Bangkok: Ecological Foundation.
- Kwanchewan Buadaeng 2006 "The Rise and Fall of the Tribal Research Institute (TRI): 'Hill Tribe' Policy and Studies in Thailand", *Southeast Asian Studies* 44(3): 359-384.
- Leesa Chucheunjitsakul 1991 *Withi Look Paa: khon pka ka nyau*, Chiang Mai: Northern Development Foundation.
- Phau Lee Paa and Kalayaa-Wirasakdi Yodtrabam 1987 *Khon Pka Ka Nyau*, Bangkok: Saaikham Books.
- Pho Le Paa and Weerasak 1996 *Phleng Chiwit Pkakeunyau*, Social Research Institute, Chiang Mai University.
- Pinkaew Luangaramsri 1996 *Phumipanyaa Niweet Withayaa Khon Phun Muang: SuksaaKaraniiChumchon Kariang nai Paa Thungyai Naresuan* [Indigenous Knowledge on Local Ecology: a Study of the Karen People in the Thungyai Naresuan Forest], Project for Ecological Recovery.
- 2003 *Redefining nature: Karen ecological knowledge and the challenge to the modern conservation paradigm*, Chennai: Earthworm Books.

- Siam Society 1922 "The Yang Kalo' (Karieng) or White Karens", *Journal of the Siam Society* 16: 39-89.
- Yos Santasombat 2004 "Karen Cultural Capital and the Political Economy of Symbolic Power", *Asian Ethnicity* 5(1): 105-120.
- Walker, Andrew 2001 "Ethnic Politics and Resource-Use Legitimacy in Northern Thailand", *Asian Ethnicity* 2(2): 145-162.